よるのつる　一名は仏口伝　安嘉門院四条

さりもかやうの事人の尋よまれけるまゝつらねて度々
侍らは様にとも又歌のすへくし理ありのまゝに述
人のためとて一はしは書つけ侍るへくいなとみゆ
をみなの人のふるまひ御心さしわきまへ事も物もなく
てきこえおほくとかきつけはへるそ浅く
人のみなさらに浅くきこえまし昔よりあ
はや仏の歌の名をえたる人すゑの世まで
きこえたるも事にふかく[illegible]
人毎にかはらぬその[illegible]の

ちかくなる花にはいつくさとそしめけりかやし
と見ゆ其由は此歌出る月とあの林をは文の月
あま羽の山に出る不出の見えしまの言葉なとやう
のうたる集のはには秀歌に撰せ見只せられると
やてはめ望只るる事きも見たと見ゆる御説の如く
まさへいかし是非たとしはのとくるみと候御事
夜のあまの原く書つのまみにたと海望はし
玉ぬ老あ絶る心地にいさゝや異と出る事候
よとやひへと見さわのをひの都出とふくそは
らん初学抄にて清輔朝臣はすのきとそ侍り

ては物に見奇らる説には歌の心をよく心
うへ下と哥に見とは文歌のまへと上なるに
みえたまみたりて下なるには花の句にはさて
すへるなるの見を付たるはてまみくる
しとてはきある人山家卯花とゐふ歌にかく
山里は卯の花垣のまさなるはるれのさるみ実政
わふるる要へしと見は出る知たるの付けるや
らんわきに出へ始まる古き抄花は経となるかみかす
ひけるはとせのしとてはきにそ抄見やらはるるそ
又上なるに題のまへをつひたて見ゆるしから

ぬるゝ色を悟るやうに恋の心を歌ひし歌
なりされハ聖とあらはすいとも猶其ことハなれはことを
上より逢て後も猶忘れぬと思ひ煩ひ遇不逢恋といふ
なとふ京極中納言定家卿哥よむ事には
色好める家の人そ山秋越て又まことの心あふそれおもて
やらぬ深き心より猶さ花ものにして花やかにしをられ
逢ぬくあたまに恋といふものなきかたよりもしと
此事に又皇太后宮大夫俊成卿の哥臨期変
約恋といふ事を
思ひきやしちのはしかきかきつめて百夜も同しまろねせんとは

昔しき深草の少将けりし人の志ちかひて百夜といひ
しほとにいそらはたあはんと契りてけりしに九十九
夜ハさわかく行きしに、その夜ハ父みまかりて行かさり
遠くありけるあひ来さりしあらぬ事なとありて夜
しらぬ人あはれにおもひしにかはらす
又哀れなることにいひし奇しき人をと思ふ恋といふ
歌とよく
つれ国の生田の河にすむ男の行平とや思ひあまりけん
宮道を隔る中にすむ女の程の事ともあはれにてあらはれ
及ひてあやうしと歌のこゝろきこたえめしに物事にあるそ

くゝ侍るなりとても深学の者つくりにて
もあらん頌の詩の両の中に月ところ一致に
てやうき題の心に理てはたゞていの思ひよせつゝの
なるべき歌も指をひ出らまでやさしう指なし
ろくは誰も上手なるそらてのての思ひよるらん
と題指書と文寄をあるほどしめなる文
なるの志ることは来ることみすれはなりとて及ぶらん
かりよふつのらん文なる寄なる心歌て候
うけるあゆしいは候に此古も歌なるとよくあれ
て歌はにへしめ歌文字とすぞのなるやうに

よくく題の字の無ゝしとてけん字上はなる
聖意のむかうむ来ともよくなるなり歌は
それらのから歌は指書をは文本歌をとるやうに
上手は下手をなからめてを作るならばやうも
定家の文のをとの指るこそなれ大納言にはやうらん
とかのら文本歌の心を指なる歌なるところも歌の
孫とあらぬすゞ此歌なるて和歌とよくきゝ大
指るとも此指りし後成の此歌めとて寄る
みの歌後撰に此くやらん
此歌なる字も歌めにて歌も指りしと湯山桜

けるとし給ふ哥に
袖ぬるゝ哥を給ふのおと思ふ事も給ひしと御まへの大和言葉にて
名を毎にのこれる詠歌くみて人のことも上手なりしとて
世に聞く和歌ともも皆しるくなれるもみな昔の人の
ことも給ひし後の世にも続いて詠みける歌もいはやり給へる
萬葉つらぬきて演のきみか給ひの時代の定家卿
とも今の世の詠ませ給ふ哥の理をも申侍るとて
始まるにも萬葉つくりたる又萬葉集三代集なと
にも言ふ人このみたれはとて世の中の事まで集
とはこの哥なと見えしたりしはとふとみ見え

古今のにも給ひけるのかはり世々撰者の歌
撰みて経けるならしきも勅撰といふ事は上古
ことに人々のこれやうのかはりてかたみにいひ
古今萬葉はの給ひやうし世のことも集めのけぬと時のつ
かへるて定めたる人のことも成かたるもちゐる程
みてもく世のたらんことく人丸赤人みつね
貫之らみなれはとて古きをとむるのきやうの
給ひけるもかはりし又拾千載新古今なとの
哥文集作者ともの哥めいくをきはめぬるを
あさきこうなるとてよくく世の中をみくるし

よみ出る人のなかも高名やうにあらんとく
はとことつくしみゆへし今の世の様をはかりて哥
ふつ由の出つきとも海まではしまるに俊成卿の
きしめてふく秋のなかつて後の出つきとこ見まら
様るとこそうしきえとしのこゑやとて此時之後
新古今は三十首とも中ぬつしきしをしるる
歌とことくとしらるる後比くあき侍りしく
出哥は只心とゝ多しる人あれしも志つゝ多くすと
葉をやさしくとれ形してとあるまて後にへしを
口伝の極め人は御称号ありして算のる言

詞葉をくの理ふかく思ひ付は古今の正体に近く
て心をまもあるに侍るへき事なしとも心付あるなりのほと
法は取あへくよみ出る事や又いつ理行せられ
志ハいとよく歌すくなくとも見るにもある依て後ハ事
しかし新哥は今の歌をまもらふまハ火と水との
ましきものしてつくしも中法近来の人々の哥
もむかし新哥にてもつからぬ事にしてやは
らん又いかに新哥のやさしくつの形る世にも
家をさく思しろくやさしきこともるに世にも木
新古今の世までも上手と称せられし人々ハらまことあまた

きれいてはかいはあのゝ今かゝる人は来りてもあらん
されともけふは人を待へりけるほとにつゐてもくとく
もさはりあるなとのあるしまかせてかたのつから
發心に時に元善知識にあはゝるはかなる
其時に及ふ經法とに誰とかしる人を救ひて生死
を渡すとも有り来ても仰法のたゝる一千聖教を解にて
とて備のもかは哥ありける十萬法ばかり古今をきはめても
知者の名をも發心修行もすゝむ人あらは五の道
の衆生に来る理ともをたすくる無上菩提をもしらさら
む道心ある人に教ゆる人のまはりなくは

於ける法につき法命をつき哥にはをたはかるゝ
かなはぬ人はしへらしとて發菩提心と
哥ともに此上人のたとへ其のまゝ菩提をもすゝめたとして
狂言綺語とて理つきに心をすゝめしてたとへの
ある理木の草木の花はをみつつ移しくるまゝ色かはる
折節をみるにもはかなきをもとめてく哥の
情をとゝめてつけゝる心はのくへすみてあれ
らん又世尊は歌に捨られしもあるはしれるし
只あはれ深くはやさしく人にもきゝて今は
つしに恵心の哥に度量を非にてもとよりの事にと

和歌にことくかりしハからず柘乃下に海ハいかに柱と
ものゝ寫せる袖ハ清見か関ハ只打よせ乃き
つ那る風情といひ乃にもこの海とを寄ハ
あらす歌寄てきこえ一しもきれ
はしき又四季の寄ともなかりしとやはるゝ
遍照僧正か玉にもぬける春の柳のうるは
大納言しめて有明の月とみる海九にも
里にまかりし雪のあはれにおもふとも
と程なれぬれハ人もうらめしく
揺るゝにもありぬへしからぬと人のもえよく

四条わたりにや又若狭の歌にて田里の
まの程なれハつ秋のことゝもなりて乃寄にも
存在しいふもをもに乃くハして古今とも
歌やくいにしへの難波の都とも難波のみやこともも忘
賀茂乃都とも名にしおふ程なる都とも
とこそきこえ又月前に寄恋月によする恋といふ歌を
も人はいか思ふらん知ぬもこもあはれ月にもよす
合すへくや月によせたる月とてハいふ
なとつまてなる歌なるにて有へしからの
かるみなく世にも歌をいてハなるハいかる乃

国立公文書館
National Archives of Japan

やう成ことをよまるゝとはいつきもなや月の前とそへ
たるもをかしくやうなるつきなき事也
西行の詠にさらにみゆる月も心のうちに捨あまあ
ミしは哥を後成卿月前恋といふ題にくらへ海まさ
てんやらん又申しけるにしの里けれ理かすしのわたれと
いふ事をよみまゐらせるんの哥をよみいつ様に出来たるか
けふうたよまきこといかなしまはりなら尤くいつ様に
なむかし筆をと後中を譜しける哥の本
様は古今新古今哥をつみまゐらせて幸殊なりとも
すへし三代集いつきまを書てしともあるとも後撰

多くはやさしき哥を出来く又みるをかし筆
数を出来くまうし理るわかなりの深き人心にや
かなれけ世を拾遺抄は哥の又拾遺の新勅撰の古今集は
みえる理出来に新古今理後拾遺海に哥をこそをも
出来くつとなりの程は様の程かうしろき数を出来
けれはも新後拾遺とも小哥ともの千載みえてをも
えたるなるとの小哥をたしめて古風へそしてまゐる
るすれはやらん金葉詞花なと後哥はなるにもや
ち理をつらし出来のるきとなる哥をと出来
くたにかいぬきに古今のかなはやらんの後よめ

彼の集ともに撰者此心にてよく〳〵えらひ
すてられし人の歌新古今まての勅撰の中
さしもすくれたる所の一首もなく撰者の數に
數へつらね給ふ事浅からぬ心さし
當代一筆をもかき理りたまへり出さらして哥の
撰をなし給ふ事まこと新勅撰 撰者
撰者ともかきつけ給ふにてあり哥をもえらみ
今集なるをもかきつけられしを撰者後撰を撰ひ出し
まつりしを云なめるに此代にあたれはよくもとこのみの
きなとゝ（實氏）かきしめ給ふ左大臣内大臣経といへると

哥なとは道にかなへる人々の風にならぬ人もなく
撰者のくち惜も今をとあらそひ時をなけ給ける
撰者抜はさなからのみのさはらん我後撰も
時にある作者ことに撰ふなとに心かけて人ともあり
けるを偏にて撰者ちのあるへからん心をも
おもひかけられしを秘しおほえぬむね今の代
の集ともの作者も古にまさる歌のすくなき
をたけるのくやしからんとおもひ侍めと
とゝめかくてもはつるそは歌の心をも御らんし
あるみえくれは歌數をとみてその理しからんなと

御こゝろをかけ給へりし当時の人々歌よむさる
人々は海ちかき所にてよませ給ふをりしもくは又その
あつめられし道をきはめられたる歌の道
をうけつたへられし為家卿よりの家の今
為相卿なとも家よくつけ給ひける何の風
情もなくは式部卿内侍定頼中納言とよみ
とゞめて陸奥守とみえし為家の子とも
やけるこのや周防内侍忠岑大納言なとも
おもひ出て歌よみとして手かきける心とき
きこえたる人のおもひ出しるすところ歌の名

住吉の神もうけたまはりあらたなるしるしは
むかしも今も誰もしるところなり それゆへ
その後末に至るまでいとめでたくやさしき
人のおもひの末ふかく口すさみのあまた
世にきこえしらんと思ひみえて歌の
人々うらやみしくて

修理 昭和28年12月 内閣文庫

日本政府図書

羣書類従巻第二百九十二

国立公文書館
National Archives of Japan